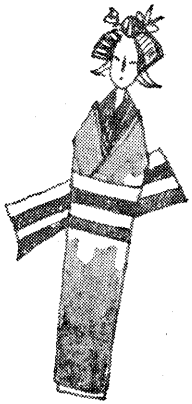
誰のための幼児教育か

黒田　成子



はじめに

「私の幼児教育論」という仮の題を与えられたが、内容、題名とも自由にということなので、ゆがめられた現代の幼児教育について記したいと思う。無気力な団地の子ども、進学に方向づけられる子どもたちを見ると教育への視点を変えなければと反省させられる。そして重度の精薄児の存在や、幼児教育の対象である幼い乳・幼児たちの姿を通して今日もっとも欠けている問題について考えてみたいと思う。

けんかのない園

先日卒業生の就職しているある幼稚園で一日を過ごした。S県の新興都市にあり、家庭層は住宅ローンで家を持っている人や団地の人たちがほとんどである。園児数は三百名余。狭い園庭に交代で出ては遊ぶしくみになっている。

私が訪れたその日は、業者から寄贈された子ども用の自転車六台がはじめて子どもたちの目に触れた日であった。交代で庭に出た子どもたちは、ピカピカ光るその新車をもの珍しそうに眺めていた。年少、年長児入り交って六十人ぐらいがかたまっている。これはきっと言い合いかけんかが出てくるだろうと先生たちはようすを見ている。

はじめに、ちょっとした小ぜりあいがあったが、わずかの時間であった。しばらくガヤガヤしたと思うと、六人の子どもが順々に白い運転コースをゆっくりと一回りしてくる。ある子どもはおそるおそると、ある子どもは慣れた手つきで。順番を待つ大勢の子どもの群はだんだん小さくなっていった。とうとう全員が自転

車にのり終わったが、けんからしいけんかは何一つ見られなかったので先生たちはがっかりしてしまった。毎日の生活の中で時にはくいちがいがおこり、当然けんかがおこっていいはずの時でもけんかをしない。自己主張をする子どもは数えるほどしかいない。本気で怒る子どもも少ない。体が触れあうようなつかみあいのけんかなどまだ一度も見かけないそうである。

けんかの少ない園はここばかりではない。ある園で見学者が子どもに「けんかをしないの？」ときいたところ「けんかをするとくたびれるもん」と答えた園児がいたそうだが、わかりの早い子ども、要領のいい子ども、無気力な子どもが多くなってきた近ごろは当然かもしれない。

団地に住むこうした子どもの母親がまたよく似た傾向を示している。母親たちはたとえ意見を持っていても波風をたてるような発表の仕方はしない。うっかり独自な意見をはこうものなら、村八分とやらにされるかもしれない。めんどうなかかわりあいは一切ごめんである。なるべく気の合う少数の人たちと、あるいは子どもの関係で仕方のない範囲にだけ生活圏を限っている人々も多いのではないか。

子どもは体力の面で狭い団地の生活に行動範囲が限られるだけでなく、知的面にも精神的にもかたよった生活におしこめられていく。相手はテレビとかワーク・ブックであったりする。もっと教育熱心な母親なら進学塾に連れていくだろう。こうして、小ぎれいで、意欲のない子が仕立てられていく現状。いったいこれでいいだろうか？　一生懸命で熱心なのは母親や教師や大人たちだが、子どもたちはほとんどいつも受け身的である。子どもは子どもとして夢中になったり、熱心になったり、はしゃいだり、ぶつかりあったり、子ども自身の生きがいを感じたりしなくていいのだろうか。いったい私たち大人は子どもを何だと思っているのだろうか？

ゆがめられた幼児教育

わが国に児童憲章が制定されたのは昭和二十六年である。しかしいまだに一人一人の子どもの幸せが、その能力にかかわりなく真実に考えられているかどうかは疑問である。この近年急に脚光を浴びてきた幼児教育については、マス・コミと幼児教育周辺の関係者の間でもっともやかましく論じられている。しかし肝心の乳・幼児はおき忘れられている感がする。いったい誰のための幼児教育であろうか？　一人一人の子どもはそのユニークな個性にふさわしい教育や養護を受けているだろうか？

保育所の不足は相変わらず深刻である。一九七二年の「子ども白書」によると約二二〇万人の要保育児童に対し、入所率は五九％にすぎない。（昭和四十六年自治省調べ）すでに九〇万人以上

の子どもが放置されているという。

また産休明けから乳児を預けたい働く母親の悩みは深刻である。無認可保育所にあきがあればまだよい方である。しかし助成金の問題から病児の保育のことにいたるまで、あまりにも大きな問題が山積している。福祉政策は看板だけに終わらせてはならない。いったいこの世に生を受けてわれわれの社会にすでに存在している乳・幼児の一人一人を何と見ているのだろうか。政治の責任をとっている人々の社会観や人間観を疑問に思うものである。

一方幼児の人格を無視した営利主義の幼稚園もあとを断たない。復古調をとりあげた最近の例としては、郊外のある新設幼稚園の実例がある。入園案内に〝お子様にお誕生日の行事に園そなえつけの礼服、すなわち男の子には羽織袴(はかま)に日本刀を差し、女の子には十二単衣の正装をさせる。ご希望に応じ、写真撮影のため衣裳をお貸しする〟とあった。このような珍しい教育は誰のために考え出したものだろうか。

塾のような幼稚園も多い今日である。川端利彦著の「問題になる子」の中の資料によると、東京都の予備校的幼稚園のうち二割近くの子どもが問題をもっている。いわゆるいい子であり過ぎるため、社会的についていけない子がふえてきている。そして喘息、じんましん、頭痛、嘔吐等の症状をおこす。これらがやがて小学校へいくころ登校拒否となったり、さまざまの問題をのりこえられなくて悪化していくわけである。

また一クラスの人数の問題は依然として解決されていない。幼稚園設置基準の「四十人以下を原則とする」を都合よく解釈して、四十人が定員でそれをうわまわるのは当然のように思う感覚がすでにずれている。それでは一人一人への配慮がどうして可能になるのか。保育はどうしても指示的、一括的にかたよることになるだろう。以上は今日のゆがめられた幼児教育の一端に過ぎない。現代においては子どもはどのように考えられているのだろうか。単に国家のために役に立つ人間として大量に、早期に教育される対象なのだろうか。

役に立つ人間とは

児童観についてはその時代によりくりかえし歴史の中で考えられてきた。しかし、最近のようにゆがんだ社会環境の中でいためつけられている子どもの姿をみて、いったい子どもとは何かという問いをあらためてもっているこのごろである。

先日三年ほど前に私の勤めている短期大学の英文科を卒業して静岡県にある重度精薄児の施設に働いている卒業生のHさんが上京してきた。それは学校で礼拝の時に話をしてもらうためであった。

Hさんの話しぶりは特に雄弁というのではなく、もの静かで、

考え考え、自分の日常の経験を短く語ったものにすぎなかったが、私たちの心を深くとらえたものであった。

彼女の話によると、重度精薄児の知能は一生かかっても三歳の幼児の知能水準を超えることはできない。すなわち何年たっても大人にならない子どもたちである。施設で働く人たちの毎日の仕事は、満足に自分の手で食事のできない子どもたちに食事を食べさせたり、排せつの習慣がなかなかつかない彼らに、根気よくぬれたパンツをとりかえてあげて、乾いた気持ちのよい感触を一回でも多くもたせ、少しでも自分の力で身辺の生活ができるようにしてあげることであるという。

それは単に回りの人たちの手がはぶけるということではなく、彼ら自身が「自分ひとりで食事ができる」とか、「おしめがなくてすむようになる」とか、ごく当たりまえのことであっても、彼らにとっては実に大きな進歩であり、生きがいとなる。だからこそ職員たちはそうした子どもを助け、共に生きることに全力をそそぐ。またそれが自分たちの生きがいでもある。

それはこれだけ教育をしたからその何倍も役に立つ人間になって国の繁栄につながるといったようなこととはおよそ反対の考え方である。役に立つ人間とは何だろうか？ エリートコースを驀進して世の中に出て、政治・経済をにない、汚職や公害の波をくぐりぬけながらたち回れる有能な人のことをいうのだろうか。それとも能力のいかんにかかわらず、与えられた可能性を精いっぱいつかおうと努力する人のことか。それは「役に立つ人間」をどう考えるかにより、つまり一人一人の価値観により違ってくるものである。

重い知恵遅れの子は彼なりに役に立つ人である。彼らの生きるたくましい努力こそ、この世に光をもたらすものである。いわゆるこの世的な尺度の有用性は問題ではなく……子どもたちはその「存在」によって価値がある。（傍点部分は長沢嶽　著「おおぞらに向かって―重い知恵遅れの子らとともに」より）

わが国では過去から、人間を人間としてみること、人間の権利のめざめが足りなかった。そして障害をもった子どもに対しては「かわいそうに」というあわれみの意識しかなく、彼を固有の人間として見ることがなかった。同じ考え方が、力のない幼児や衰えて役に立たなくなった老人に対してなされた。幼児はまだ幼く、社会に役立たないもの、いずれ勉強をさせ、早く仕立て、準備ができたら社会の桧舞台で活躍させる。老人はすでに役目の終わった人でもう用はない。これでは社会のためという旗じるしのもとで、人間は特定の役にたたなければ意味がないことになる。人間軽視も甚だしい。特定の肩書がなくなると急に価値が薄れるように思うことと同じである。

一人一人の子どもは固有の存在をもっている。ある基準に照ら

して、これはすぐれていてあれはおとっていると比較できないものがある。しかもその子ども独特のものを伸ばすことにより、子どもはますますその子らしく成長していく。長沢氏らはそろばん勘定では成り立たない事業を、あえて知恵遅れの子どもたちのためにしている。それは「子どものうちに潜在している能力が十分引き出されることが彼の人間としての当然の権利である」からであるという。これは健康体の子どもにも同じくあてはまることではないか。幼児教育は個人の営利のためでも産業界のためでもない、その子ども自身の人間としての確立のためにあるのである。この自明のことを私たちは現代にあって実感として理解しているだろうか。

「思いやり」をどう生きるか

昭和四十八年の十一月二十六日の朝日新聞に「何のための一貫教育か」と題する論説が出ていた。後半のところで「……第一に考えてほしいのは、もっぱら競争原理によっている今日の学校教育を連帯の原理にもとづくものに変革するにはどうすべきかという問題である」とあり、その変革のために「企業の就職、昇進の条件、大学の格差の是正などの構造変化」と小・中・高の教育改善をあげている。さらに自主的に考え、批判力をもった行動的な人間の必要を説いている。これは幼児教育にもいえることであるが、単に主体的な人間をめざすだけでなく、さらに問題を深めると、その人間と人間同志の相互関係性ということが出てくる。日本の子どもは自己充実と共に他者との関係の中で生きる喜びを、もっと幼児期から育てられる必要がある。

最近役所関係の幼児教育指導において能力主義でなく「思いやり」の教育ということがとりあげられているともれきいて喜んでいる。しかし「思いやり」の方法は今後十分検討されなければならないことである。たとえば、もしこれらが従来の徳目主義の衣がえであるとすれば、もっと視点をかえる必要があるだろう。

「思いやり」は単なる道徳のワクぐみにとどまっていてはいきいきしさを失うと思う。もっと私たち人間一人一人が互いの人格を認め合い、相手をその人なりにフルに受け入れようとする信頼関係に立つものでなければならない。そのことにより相互関係が密になり連帯感が生まれてくる。

「ボク、テレビばっかり見ていた」とか勉強を全然していないなどと言って相手を安心させておいて実は猛勉強をして友だちを追いぬかしたりする小学生。クラスの一人が病欠すると競争者が一人減ったと喜ぶ中学生たち。こうした子どもたちには連帯感など全く思いもよらないことなのだろうか。何となくかたまり合ってばかりいて、必要な時に自分はこう思うとハッキリ言えない女児たちをよく見かける。ちょっとみると緊密なグループに見える

が、いざ何かの事がらがおきると、ほんとうはバラバラであったことがわかったりする。幼児の「思いやり」はどのように実生活の中で生きるのだろうか。

まず子どものことを考えてみたい。その子どもは、ベテラン教師の中にある年々集まってくる平均的な三歳児や四歳児ではなく、現時点の「今」を生きている○○君、または○○ちゃんである。○○君にとって幼稚園とは何か？　友だちとは？　彼の考える「思いやり」とは何だろうか？

彼は相手の区別がつくより先にまず自分について知らなければならない。自分を知ることは赤ちゃんの時から始まっている。五ヵ月ぐらいの時彼は自分の指を眺めたり、なめたり、物をとろうとして指を動かしてみたりする。成長するにつれて家族や友だちがどのように自分に反応するかによって自分というもの、また他人というものを知るようになる。

これらのことは、生活や遊びの中で子どもが自分で事物に触れたり、いろいろの人に出会ったり試行錯誤の経験をしながら遊びや学習の中で身につけていく。乳、幼児期に彼は家庭や園や友だちとつくっているそれぞれの集団の中で育つ。この時期に自分が人に受け入れられていること、必要とされていることを知ることにより安定感と自信が育てられていく。父母の間で、または保育者同志で、互に信頼し合っている関係にあること、そうした共同体の中で「思いやり」がいきいきと息づいていると、子どもは知らず知らずにそれを肌で感じ取っていく。

教師は子どもたちと共に現場の生活の中で具体的に「思いやり」の経験をもつことこそ大切である。それは「思いやり」について話すことより効果があるだろう。思いやりはとかく静的なやさしさの中にあるように思われやすい。園の飼育物にこまやかな心くばりをすることや、休んでいる友だちのことを考えたりすることなどのように。しかし、時には荒々しいけんかの中から思いがけない友情が生まれることもあろう。それも相手のことを考えるやさしさがきっかけとなったりする。また教師が子どもをつきはなして遠くから見ていることもあるだろう。「思いやり」はいろいろの形をとって現われるから私たちはそれを見いだしていかなければならない。

以上幼児教育のいくつかの断面をとりあげながら、現代社会の中で忘れられようとしている人間観の問題を考えようとした。知識や技術の調教師が流行するようでは、人がほんとうの人間として生きることとはほど遠い。何のための幼児教育か。そして誰のためか？　子ども自身を生かし、子どものための幼児教育が必要である。それは原点にもどり、人間とは何か、子どもとは何かをあらためて問い直すところから始まるのではないだろうか？

（東洋英和女学院短大）